



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌとして知里真志保に学ぶこと
Author(s)	横山, むつみ
Description	生誕百周年記念シンポジウム「知里真志保 人と学問」. 平成21年2月22日. 札幌市.
Citation	知里真志保 人と学問 : 生誕百周年記念シンポジウム予稿集, 54-56
Issue Date	2009-02-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38290
Type	conference paper
File Information	7_54-56.pdf



アイヌとして知里眞志保に学ぶこと

横山むつみ

知里眞志保生誕 100 年が 2 月 24 日に迫っています。又、眞志保の没後 50 年も 2011 年と直ぐ目の前です。眞志保が亡くなってから、半世紀近くの時の経過があります。最初の 50 年、眞志保が生きていた時代のほとんどは、同化政策（同化教育）がとられ、アイヌの文化やことばが排除されていました。その後の 50 年、眞志保が亡くなった後ですが、アイヌ民族の中から、その復権・復興に取り組むたゆみない努力、長い忍耐、非暴力の静かな戦いがくり広げられました。確実に、アイヌとしての民族意識がめざめた時期ともいえます。そして、‘今’、アイヌ民族の置かれている状況が、大きな変革期を迎えています。

この変革期にこうして知里眞志保の業績を振り返るシンポジウムが行われることは、意義深いものがあります。一人のアイヌとして、知里眞志保に学ぶことを考えてみたいと思います。

要 旨 アイヌ語学者知里眞志保に学ぶとしたら、その業績に学ぶことが何ととっても一番大切なことだろうと思う。知里眞志保なら、「私の辞典の中身から学べ、業績以外から学ぶことはない」と断固として言うに違いない。しかし、凡人の私は、人間としての「心の動き」、学者となるまでの「道のり」などについても関心がある。眞志保というアイヌ、その人間の背後の「歴史」から学ぶことも忘れてはならないことのように思える。今回は眞志保のやさしさに迫ってみたいと思う。

1. 知里幸恵の手紙の文章に描かれる眞志保少年

少年だった頃の眞志保、その姿を姉幸恵の文章から紹介して話します。

◎大正 9 年 5 月 17 日母宛の手紙

◎大正 7 年 5 月ころ母宛の手紙

◎大正 11 年 4 月 9 日両親宛の手紙

◎大正 11 年 7 月 4 日付両親宛の手紙

2. アイヌの人たちからの眞志保への見方

アイヌの人たちがどのように眞志保を見ているか紹介
生まれ故郷登別の一般的評価について
知識人からの見方について

3. アイヌの歌人森竹竹市の歌に詠まれる知里博士

森竹竹市の短歌三首に歌われる知里博士を紹介します。

- ◎ただ一人 アイヌの学士 でたからと 大騒ぎする 新聞の記事
- ◎文学博士知里眞志保こそウタリーの象徴として永久に輝く
- ◎学ぶこと言葉すること禁止されし怒りに起ちて得たり博士を

4. 「詩風土」に見える知里先生

渡辺ひろしが読む詩「バスで見た知里先生」を紹介して話します。

5. その他

- 参考文献 『レラコラチ 森竹竹市遺稿集』
『知里眞志保の生涯』藤本英夫（新潮社）
『知里幸恵遺稿 銀のしずく』（草風館）
『詩誌 詩風土』枯木虎夫（詩風土の会）

『アイヌ神謡集』

序

その昔この広い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。天真爛漫な稚児^{おきなご}の様に、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた彼等は、真^{まこと}に自然の寵児、なんという幸福な人だちであつたでしょう。

冬の陸^{くが}には林野をおおう深雪^{ふかゆき}を蹴^すって、天地を凍らす寒気を物ともせず山又山をふみ越えて熊を狩り、夏の海には涼風泳ぐみどりの波、白い鷗の歌を友に木の葉の様な小舟を浮べてひねもす魚^{すなど}を漁^いり、花咲く春は軟らかな陽の光を浴びて、永久に轉ずる小鳥と共に歌い暮して蔭^{かげ}とり蓬摘み、紅葉の秋は野分に穂揃うすすきをわけて、宵まで鮭^{かがり}とる簞も消え、谷間に友呼ぶ鹿の音を外に、円かな月に夢を結ぶ。嗚呼なんという楽しい生活でしょう。平和の境、それも今は昔、夢は破れて幾十年、この地は急速な変転をなし、山野は村に、村は町にと次第々々に開けてゆく。

太古ながらの自然の姿も何時の間にか影薄れて、野辺に山辺に嬉々として暮していた多くの民の行方も亦いずこ。僅かに残る私たち同族は、進みゆく世のさまにただ驚きの眼をみはるばかり、しかもその眼からは一挙一動宗教的感念に支配されていた昔の人の美しい魂の輝きは失われて、不安に充ち不平に燃え、鈍りくらんで行手も見わかず、よその御慈悲にすがらねばならぬ、あさましい姿、おお亡びゆくもの……それは今の私たちの名、なんという悲しい名前を私たちは持っているのでしょうか。

その昔、幸福な私たちの先祖は、自分のこの郷土が末にこうした惨めなありさまに変わらうなどとは、露ほども想像し得なかったのでありましょう。

時は絶えず流れる、世は限りなく進展してゆく、激しい競争場裡に敗残^{みにくさ}の醜^{みにくさ}をさらしている今の私たちの中からも、いつかは、二人三人でも強いものが出てきたら、進みゆく世と歩^{あゆみ}をならべる日も、やがては来ましょう。それはほんとうに私たちの切なる望み、明暮祈っている事で御座います。

けれど……愛する私たちの先祖が起伏す日頃互いに意を通ずる為に用いた多くの言語、言い古し、残し伝えた多くの美しい言葉、それらのものもみんな果敢なく、亡びゆく弱きものと共に消失してしまうのでしょうか。おおそれはあまりにいたましい名残惜しい事で御座います。

アイヌに生まれアイヌ語の中に生いたった私は、雨の宵、雪の夜、暇ある毎に打集めて私たちの先祖が語り興じたいろいろな物語の中極く小さな話の一つ二つを拙ない筆に書連ねました。

私たちを知って下さる多くの方に読んでいただく事が出来ますならば、私は、私たちの同族祖先と共にほんとうに無限の喜び、無上の幸福に存じます。

大正十一年三月一日

知 里 幸 恵